

歲月のかたみ

坂上精一郎

文藝書房

表紙写真・福岡県久留米市・耳納連山（兜山の湖）

玄一郎の肩越しに野元の死顔を覗いた時、彩子の中に奇妙な感情がこみあげていた。それは憎しみでも、怒りでもなかった。

胸がつまるようないとおしさだった。

野元の頬は削げ、脂つ気のない乱れたままの長髪は、白いものが目立っていた。そして、深い眠りに落ちた無言の表情は、塑像のように優しい光を放っていた。

彩子は、係官と玄一郎さえそばに居なければ、すがりついて抱きしめてしまいたいほどの感動を受けていた。

さすがに十年の歳月の疲れが滲んでいた。しかし、彩子の眼には放浪の果ての安息とでもいうべき、おだやかな寝顔に見えた。

「間違いありません。父の野元康弘です」
係官に応えた玄一郎の声は乾いていた。

玄一郎の心の中にはやはり、家族を捨てた者への許しがたい感情が渦を巻いていたのかも知れない。

彩子は、玄一郎を残して先に霊安室を出た。そして、人氣のない暗い廊下の片隅に行くと、そつと両の目頭を押えた。

野元の遺体の確認が終ると、彩子と玄一郎は被疑者でもないのに取調室で待たされた。鉄格子のついた小窓を激しい雨脚が叩いていた。

東京を発つ時はあるかなしかの小糠雨だったものが、米子空港に着いてみると篠つくような雨に変わっていた。

玄一郎は鉄格子のついた小窓が気に障るのか、胸のポケットから煙草を取り出して火をつける
と、

「しかし、どうして島根なんだよ」と声を荒らげていった。

「だって、親父は九州の生まれだし、島根には何の関係もないじゃないか」

「そうね……どうしてでしょうね」

彩子は氣のない返事をした。

それより彩子は、薄暗い霊安室の中の饅えた臭いが気になっていた。あの饅えた臭いが野元の死体から発せられる腐臭だとすれば、一日も早く火葬をすませる必要があった。

「親父のことだから、ほうぼう流れ歩いて、たどりついた処が島根だというわけか」

玄一郎はまだこだわっていた。彩子は、考えても仕様のないことなのに、と思いつながら、

「多分、そうかも知れないわね」と素気なく応えた。

「それにしても、島根とはね……どうも解せないよ」

「あるいは島根に来て、身体を悪くしたのかも知れないわ」

彩子は仕方なく言葉を継ぎ足すようにいった。

「無茶苦茶やってたからね」

「そうね」

「十年もの間たよりの一つも寄越さないで……まったく勝手な親父だよ」

彩子は、その時ばかりは抑えた強い口調で、

「場所柄をお考えなさい」と息子をたしなめた。

そして、わずかな沈黙のあと、話題を変えるように外を見つめていった。

「島根は、雪が深いのかしら」

降りしきる雨脚は、いくらか弱くなっていた。

「日本海だからね。深いんじゃないの」

「雪とか雨とか、好きなひとだったから」

山陰の見知らぬこの土地が、野元にとつては意外に住みやすい処であったのかも知れない、と彩子は思った。

そこへ眼鏡をかけた背の高い中年の男性が入ってきた。粗末な机の前に窮屈そうに坐ると、

「刑事課長の鈴木です」と名乗った。

玄一郎は慌てて煙草を揉み消し、

「野元玄一郎です。このたびは父のことで大変ご迷惑をおかけしました」と深々と頭を下げた。

「ほんとうに、お世話になりました」

彩子も型通りの挨拶をした。彩子は自分の立場を考えるとあまり差し出がましいこともいえず、といてよそよそしいふるまいもできなかった。

野元の遺体は、署内の霊安室に安置されたまま一週間になろうとしていた。その上解剖されているためかなり腐乱が進行しているという。

事件がらみでない身元不明者の遺体の保管は、死因に不審な点がない限り一週間程度と決められていた。従つて期限切れの明朝には、市内の火葬場で荼毘に付される手筈になっていた。

刑事課長は、遺体の腐乱の状況を考えて、

「これから東京へ運んで、火葬の手配をされるのも大変でしょう。そちらさえよかったら、予定通りこちらで荼毘に付されてはいかがですか」といった。

彩子は即座に、

「ご好意に甘えて、そう致しましょう」と玄一郎にいった。

自分の方の事情を考えると、その方が何かと都合がよかった。

「死亡原因は、左手首の動脈切断によるもので、覚悟の自殺と断定して間違いありません」

刑事課長は一応、捜査の経緯について説明した。

それによると野元は、アパートの浴槽にいっぱいの水を張り、下着の上に紺の白い浴衣を身につけていた。たぶん本人は死に装束のつもりだったのでしようと、刑事課長はいった。

そして、この種の自殺では大方が手首にためらい傷があるものだが、野元の場合はそれがなかった、ともいった。

「見事というか、骨に達するほど一筋に斬られていました」

「そうですか……」

玄一郎はさすがに苦渋を浮かべた表情で聴き入っていた。彩子は胸の内で、いかにも野元らしい死に方だと思った。

「それに、なぜか、四、五日前から絶食されていたようです。解剖の結果、胃の中には食したものの残滓が何もなかったということ……勿論、睡眠薬その他の薬物の反応も一切ありませんでした」

刑事課長は茶封筒の中からわざわざかばかりの遺品を取り出して、机の上に並べた。

メツキの剥げかかったジッポウのライターがあった。そしてモンブランの万年筆と、文字盤の硝子に一筋の亀裂が入った国産の腕時計、手垢の染みた普通預金の通帖があった。

ライターも万年筆も時計も、いずれも彩子には見覚えのある懐かしい品ばかりであった。

「遺書と共に、机の上にきちんと並べてありました」

玄一郎は白い封筒から一枚の便箋を取り出して目を通した。それは世話になったアパートの管理人にあてたものらしく、

「ご迷惑をおかけします。同封のものは費用にお使い下さい」と野元の筆跡で簡単に書かれていた。

「あの」と玄一郎は訊ねた。

「たとえば日記帖とか、原稿のようなものはなかったでしょうか」

「ああ、そのことですがね」と刑事課長は捜査報告書をめぐりながら応えた。

「管理人の話によると、野元さんは亡くなる一週間ぐらい前から、アパートの空地で何やら焼却されていたそうです。それが相当量のノートやら、原稿用紙みただったといっています。ですから、死を決議されてから、身のまわりの物を少しずつ処分されていたのではないかと……もつとも、そういうものが残っていれば身許も早くわかって、あなた方への連絡も遅れることはなか

ったのですが」

「そうですか、お手数をおかけしました」

「野元はこちらで、何か仕事についていたのでしょうか」

彩子は遠慮がちに訊ねた。

「ええ」と刑事課長はまた報告書を覗きながら応えた。

「山陰アド企画という会社に、足掛け十年近くお勤めになっていました。社長や同僚の評判もなかなかよかったようですよ」

「十年……」

玄一郎が訝しげに呟いた。彩子も同じ思いであった。

「就職されたのは、昭和五十八年の十月となっております。実を申しますと、野元さんを採用する際に、身許を証明するものをちゃんと提出させておけば、今回のようなことはなかったのです」

刑事課長は、彩子と玄一郎の手前、弁解がましくいった。

「ま、小さな会社ですから、うるさくいつても仕様のないことですが……社長は、野元さんの経歴と人柄を信用して、身元調査もしなかったというんです」

彩子は刑事課長の説明を最後まで聞いてはいなかった。

昭和五十八年の十月といえば、野元が家を出てわずか四カ月後のことであった。

〈野元は、私と別れてすぐこの島根に来たのだろうか〉——彩子の脳裏に先ほどの玄一郎の言葉が甦っていた。

「ほうぼう流れ歩いて、たどり着いた処が島根だというわけか」

その時は玄一郎のこだわりを、考えても仕様のないこと、と相手にもしなかった。

しかし今、彩子は得体の知れない胸騒ぎを感じていた。

野元は、玄一郎の推測とはちがってほうぼう流れ歩いてはいなかった。彩子と別れたわずか数カ月後にはもう山陰のこの小さな町にあらわれていた。いや、正確には就職したのは十月であっても、島根に来たのはそれよりもっと早い時期であるかも知れなかった。あるいは、彩子と別れたその脚で島根に向かった可能性もなくはなかった。

彩子は、家を出てからの野元の足跡に何かしら隠された目的があるような気がした。そして野元はその目的のために彩子と別れ、玄一郎を捨てたのではないかという疑いが頭をもたげていた。

「しかし、山陰日日新聞と浜田海産物の高橋さんの奥さんには、感謝しなければいけませんな」

刑事課長はそういって、机の上に地元紙の社会面を拡げてみせた。

玄一郎は覗きこんですぐ眉をひそめた。紙面の中央に・一人暮らしの男性が自殺・という見出しがあった。そして、三日後の同じ社会面には・この人を知りませんか・という囲み記事に、野

元の写真が掲載されていた。

「この記事を見て、高橋靖子さんがお電話を下さり、おかげで初めて仏さんの身もとが判明したわけですから」

「あの、高橋さんと野元はどういうお知り合いだったのでしょうか」

彩子はさりげなく刑事課長に訊ねた。

「高校時代の同級生だとおっしゃっていました。なんでも三十数年ぶりだとかで、野元さんが浜田に住んでおられたことも御存知なかったようです。新聞を見て、半信半疑のまま電話をかけたということでした」

「その高橋さんが、どうして私どもの住所を……」

「同窓会の名簿です。それも、わざわざ高校時代の友人に問い合わせさせていただいたということでした」

彩子はふと、野元と結婚して間もなく里帰りした折に会った清川次男の顔を想い浮かべた。清川は高校時代の野元の親友で、当時は福岡県大牟田市の水道局に勤務していた。

「高橋さんは、野元の遺体をごらんになったのでしょうか」

「ええ、確認の意味でごらんいただきました。なにしろ唯一の情報提供者でしたからね」

「それで、野元に間違いないと……」

「ええ、九分九厘間違いないと……高校時代の同級生とはいえ、三十年以上の歳月がたっているわけですからねえ。しかし、変わり果てた姿に胸が痛んだのでしょうか、たいそう涙を流しておられました」

「そうですか……」

彩子は頷きながら、見も知らぬ高橋靖子という女性について、清川次男に訊ねてみなければならぬと思った。

「高橋さんの旧姓はおわかりでしょうか」

彩子は思いついて刑事課長に訊ねたが、警察はそこまで調べていなかった。

彩子は玄一郎に、野元が勤めていた広告会社と山陰日日新聞社、世話になっていたアパートの大家の住所と電話番号をメモするようにいい、自分は高橋靖子の手帖に控えた。

「火葬は九時半ですから、一時間前に署へおいで下さい」

刑事課長はそういって、東京から駆けつけてきた母子の労をねぎらった。そして、二人のためにわざわざ部下に命じてホテルをリザーブしてくれた。

浜田署を出ると、いつの間にか雨は小降りになっていた。

彩子と玄一郎はタクシーでホテルに向かいながら、さすがに疲労を感じた。

「判で押したように一万円か……」

玄一郎はシートにもたれて、野元が遺した預金通帖をしげしげとみつめた。十年近く積みたてられたものは、一度として引き出された形跡はなかった。

「葬式代のつもりだったのかな」

玄一郎がまた呟くようにいった。

「無頼で、放埒だったひとが……」

彩子は、今更のように十年という長い歳月の空白を感じないわけにはいかなかった。

「それにしても」と彩子は思った。

「どうして、島根に来たのかしら……」

「え？」と玄一郎が訝しげに彩子をみつめ、

「いまさら、なんだよ」と呆れたように声をあげた。

先ほどの彩子の態度が根にあるらしかった。

「ううん、いいのよ。これは私だけの問題ですからね」

彩子は多くを語ろうとしなかった。

「ところで、挨拶まわりの方はどうしようか」

「新聞社と広告会社の方は、東京へ帰ってから礼状でもお出しすればいいわ。ただ大家さんにはお会いして、お礼とお詫びを申し上げなければいけないでしょう。それは、あなたの役目ね」

「俺の？ おふくろはいかないの」

「なにいつてるの、私は別れた女房です。親子の絆は死ぬまで切れないけれど、夫婦は別れたら他人ですからね。他人の私がこのこ出かけていったら、おかしな話じゃありませんか」

彩子はそういつて玄一郎の顔を見ようとしなかった。

「高橋さんはどうする。親父が無縁仏にならずにすんだのは、高橋さんのおかげだからね」

「高橋靖子さんには、明日にでも私がお会いします」

「じゃ、おふくろはもう一日残るわけ」

「あなたはお骨を持ってまっすぐ帰ればいいわ。私は都合によっては、一日おくれて帰るようにします」

「遺骨を持って帰って、あとが面倒だね。告別式なんかどうするのかねえ」

玄一郎が眉をひそめて、困惑したようにいつた。

「とりあえずお骨はお義母さんの御仏壇に置いて、お線香だけは欠かさないようにして頂戴。それから、京子さんのお身内にはまだ知らせないで……」

彩子の怒ったような口調に、玄一郎は黙った。

ホテルは町はずれの静かな入江にあった。

玄一郎はそのまま大家の処に挨拶に行くことにして、彩子は一人でチェックインした。

五階建てのさほど大きくもないホテルのフロアは、季節外れの雨のためか閑散としていた。

ボーイに案内された部屋は二間続きで、思ったよりはるかに小ぎれいな感じであった。

カーテンを開けると、海辺に向かってバルコニーが突き出していた。

「天気の良い日は、すばらしい眺めでしょうね」

窓の向こうに日本海が広がっていた。しかし、海は小雨にけぶり灰色に濁っていた。遙か水平線のあたりは真っ黒い雲に覆われ、空と海の色の特徴もつかなかった。

「これが、日本海なのね……」

押し寄せる波頭を眼のあたりにしながら、彩子はひとり呟いた。

ボーイが去ると、彩子はくつろぐ間もなく東京の留守宅に電話を入れた。そして嫁の京子に、

「私の部屋に入って、書棚の右端の抽出しにある野元の住所録を見て下さい。福岡県大牟田市の清川次男さんの電話番号が知りたいんです」といった。

時計をみると、三時を少しまわったばかりであった。彩子は三十数年前に会った清川の顔を想い浮かべ、今ごろは課長か部長には出世しているかも知れないと思った。

京子が読みあげる電話番号をメモすると、

「明朝、こちらで茶毘に付すことにしました。玄一郎はお骨を持って、明日の夕方までにはそちらへ帰ります。私は用があつて、一日遅れるかも知れません。詳しいことは玄一郎からお聞きになつて」と短くいつて切つた。

彩子の胸の中に生れた小さなしこりのようなものが、チクチクと痛みを伴っていた。

彩子はメモしたばかりの清川の電話番号をみつめ、束の間思いをめぐらし、それからゆつくりとダイヤルをまわした。

清川次男の名前を告げると、交換手は、

「福祉課長の清川ですな」といった。

「はい」と彩子は応えた。

間をおいて出た清川の低い声を、彩子が憶えている筈もなかつた。

「野元、彩子でございますが、覚えていらつしやるでしょうか」

「ああ、野元の奥さんですか」

清川は懐かしげに屈託のない声をあげた。

彩子は長い間の無沙汰と、勤務中に電話をすることの非礼を丁重に詫びた。そして、何事かと不審を抱く清川に、

「野元が島根で亡くなりました」と伝えた。

「えっ」と清川は絶句した。その驚きようは尋常ではなかった。

彩子は、そんな清川に手短かにことのいきさつを語った。

「今朝ほど浜田署から連絡をいただいて、息子と一緒に取るものも取りあえず駆けつけて参りました。亡くなったのは一週間も前のことで、手首を切つて、覚悟の自殺ということでございました」

「そうですか……自殺でしたか」といって、放心したように息をのむ清川の様子が彩子に伝わってきた。

「野元が身許を隠していたため、遺体の引き取り手もないまま無縁佛になるところを、地元の新聞をご覧になった高橋靖子さんという方が、警察にお電話をなさつて、それで、私どもの所在がわかったということでした」

「高橋靖子……それでは、あの三原君が新聞記事を見て、野元だとわかったというんですか」

清川は意表を突かれたように甲高い声をあげた。清川はやはり高橋靖子を知っていた。そして、彩子は初めて靖子の旧姓が三原であることを知った。

「あの」と彩子は遠慮がちにいった。

「清川さんは、高橋靖子さんを御存知ですわね」

「ええ。彼女は高校時代、私たちと同じクラスでした。結婚して姓は変わっていますが、三原靖

子君です」

清川は応え、あらためて、

「三原君の処に、野元が……」と驚きとも溜息ともつかぬ声をあげた。

「奥さんは、三原君とお会いになったんですか」

野元と別れて久しいことを知らないのか、清川はまだ彩子のことを奥さんと呼んだ。

「いいえ、私はまだお会いしておりませんけれど」彩子は応えた。

「失礼ですが……」と清川はくぐもつた声でいった。

「野元と三原君は、何か約束でもしていたんでしょうか」

清川は、彩子の簡単な説明を聞いただけで、何の疑いもなく二人を結びつけて考えていた。

彩子の知らない歳月の向うで、一体、野元と靖子との間に何があったのか・彩子はどうしても清川に訊いておかなければならないと思った。

「清川さんは、野元と靖子さんの関係について御存知ですわね」

彩子は、清川のぶしつけな質問を無視してそう訊ねた。

清川は電話の向こうでためらっていた。わずかに沈黙したあと、

「奥さんは、野元から何にも聞いておりませんか」といった。

「いいえ、なんにも」

「そうですか……野元が黙っていたものを、いまさら私が話していいものかどうか……」

清川は戸惑いを隠せないでいた。

「靖子さんは、野元が島根にいたことすら御存知なかったようです。でも、野元は家を出たあと、間をおかず島根に移り住んでいました。なぜ野元が十年もの間島根にいたのか、私はその真意を知りたいんですの」

「三原君は、本当に野元が島根にいたことを知らなかったのでしょうか」

清川は、信じられないとでもいいたげに声を高くした。

「警察では、そのようにおっしゃっておりました」

「しかし、そうすると二人は、十年もの間一度も会わなかったということですか」

「そうとしか、考えようがありませんけれど……」

彩子は、言葉を濁した。

「あいつらしいといえば、あいつらしいが……それにしても、彼女のいる島根を死に場所を選ぶとは……」

清川は誰にいうともなく呟くようにいった。

彩子は、その言葉を聴いて不快に思った。それは、清川がふと洩らした独りごとに近い言葉であった。しかし、自分の知らないところで、すべての事情を呑みこんでいるような芝居があった

台詞の中に、野元の心情を想う優しさは籠められていても、彩子の気持ち思いやる優しさは感じられなかった。

彩子は三十数年前に会った、いかにも公務員といったタイプの実直そうな男の顔を想い浮かべ、露骨に眉をひそめた。

やがて清川の方から、勤務中なので夜分にホテルへ連絡をするといいい、彩子は非礼を詫びた上で、くれぐれもお待ち申し上げております、と伝えて電話を切った。

彩子の胸の中に見えかくれていた黒い影が、少しずつ姿をあらわしていた。

「桜の季節には、さぞかしきれいでしょうね」

彩子はハイヤーの運転手に声をかけた。

斎場に登りつめて行く山道の両側には、紅葉した桜の並木が続いていた。そして、昨日の篠つくような雨は、季節にふさわしい小糠雨に変わっていた。

斎場はなだらかな丘陵の中腹を切り拓いて造ったものらしく、まわりを深い雑木林に囲まれていた。

浜田署で手配してくれた霊柩車は、野元の遺体を送り届けるとすぐ引き返していった。早朝の

火葬とはいえ、斎場は思いがけない人で溢れていた。どうやら数組の火葬が同時に行われる様子だった。

玄一郎は気おくれたのか、

「やはり、東京まで連れて帰るべきだったかな」と声を落とした。

「ううん、これでいいの。あなたと私がついているんですもの、あのひともきつと喜んでいる筈よ」

野元の柩に付き添っているものは、彩子と玄一郎の二人だけであった。さすがに彩子も寂しい想いがしたが、息子の気持ちを考えてとそういつて慰めるしかなかった。

「しかし、それにしても寂しいよ」

「いいの。あのひとは、無縁佛になることを覚悟していたんですから」

九時半になると、黒い礼服に身を包んだ職員があらわれて、

「それでは、最後のお別れをして下さい」といった。

玄一郎は、しおらしく柩の小さな扉からあらためて野元の死顔をみつめ、形ばかりの合掌をした。

彩子は離れて立ちつくしたまま、柩のそばには寄ろうとしなかった。

職員の男が、よろしいんですか？ というように眼で問いかけてきた。彩子は、